秋から冬にかけての洋ラン栽培

大部分の洋ランは秋から春にかけてが開花期であり、一年間の努力の結果が報いられる楽しい季節ですが、この期間の栽培如何によっては、花芽が分化しなかったり、蕾が枯れたりしますので、この期間を無事に越させ、開花させるために十分な注意をはらって下さい。

温　　度

9月頃にもなると気温も次第に下り、戸外栽培の洋ランもそろそろ室内に取り入れる準備をしなければなりません。バンダ、カトレヤ等は9月中には室内に取り込みますが、入室後は室温に注意し、晴天の日などは窓を開放して通風を計り、急激な気温の上昇を防ぎます。

シンビデューム、デンドロビューム等の低温種は、10月いっぱいくらいまでは戸外に出しておき、十分に冷気にあて花芽を分化させます。

11月以降春まではすべて室内栽培になりますが、高温は落蕾の原因ともなりますので、最高気温を25℃くらいまでとし、最低温度はバンダ、ファレノプシス等では20℃、カトレヤ、ミルトニヤ等では15℃、シンビデューム、デンドロビューム、オンシジューム等では10℃くらいを保てば申し分ありません。

湿　　度

温室内ではさほど心配することはありませんが、居間等の人が生活する室内では一般に湿度が低く、落蕾の原因となったり、花保ちを悪くしますので、このような所では時々シリンジを行なったり、蒸発皿を置きます。また加湿器を置き湿度を高めるのも一つの方法です。

光　　線

日増しに光線も弱くなり、日照時間も短くなりますので、日光には十分に当るようにします。

シンビデューム、デンドロビューム、カトレヤ等は勿論のこと、ファレノプシス、ミルトニヤ等も葉焼けを起こさない程度の強光に当てたいものです。

シンビデューム等の緑花、白花種では、蕾が見えてきたら遮光します。光線が強いと花色が濁ります。

通　　風

寒さが厳しくなるにつれ、とかく室内が密閉されがちになりますが、室内が蒸れると病気や落蕾の原因ともなるので、できるだけ換気を計ります。

密閉された所では室内に扇風機を取りつけ、空気を絶えず移動させるだけで生育は良くなります。

灌　　水

一般に冬期間は灌水を減らしますが、バンダ、ファレノプシス等では、温度さえ十分であれば年中生育を続けるので、灌水量を減らす必要はありません。

デンドロビューム、カトレヤ等では徐々に灌水量を減らしバルブ（茎）を充実させますが、一度灌水した鉢はなかなか乾きませんので、鉢の中心まで乾くのを待って次の灌水を行ないます。

施　　肥

置肥は9月頃まで施し、それ以降は必要に応じ極く薄い液肥を1～2週間に1回くらいの割合で与えます。

シンビデューム、デンドロビュームの開花株では、8月頃までで一切の施肥を中止します。開花時期まで施肥を続けると、花が奇形となったり、花色が濁ったり、花芽が葉芽に変わったりします。

その他、弱っている株、株分け植換えを行なった株でも、新根が十分に伸びるまで一切の施肥を中止します。

植 換 え

秋は春についで植換えの適期ですが、植換えは鉢内に根が充満した場合、植込み材料が腐敗した場合、または何らかの理由により植換えが必要な場合にのみ行ない、あまり頻繁に行なわないようにします。

植込み方法は経験者に指導してもらうのが最良ですが、それが不可能な場合、次の点に注意して植込んで下さい。

まず株の状態を良く観察し、その株が植換えに耐えうるかどうかを良く調べ、株が弱っている場合は翌春まで待ちます。

健全な株であれば、根を傷めないように鉢から抜き、腐った根や植込み材料を取り、根の回りを新しい水苔で包み適当な大きさの鉢に入れます。この際必要があれば株分けも同時に行ないます。

植込みの硬さはカトレヤ、デンドロビュームではやや硬く、指で押しても埋まらない程度に、ミルトニヤ、シンビデューム等ではそれよりやや軟らかく、カトレヤ等の小苗では最も軟らかく植込みます。

植込み直後に十分灌水し、その後は灌水を中止してやや乾かし気味で3～4週間育てます。この時あまり乾き過ぎるようであれば軽く灌水し、極端な乾燥を避けます。

シンビデューム、パフィオペディルム（旧称シップ）では1週間くらい水を切る程度で良いでしょう。

普通、植換え後3～4週間で新根が伸び始めますが、新根がどんどん伸びてきたら普通の灌水に戻します。

株 分 け

普通は植換えと同時に行ないますが、植換え数ヵ月前に鉢内で株を切り離し、バックバルブ（前年以前に生育した古い茎）に発芽発根が見られてから植換える方法もあります。この方法ですと植え傷みも少なくてすみます。

植込み材料

特別な場合を除いて、水苔単用かオスマンダ混用で行ないますが、大鉢での水苔植えは過湿になりやすいため、発泡スチロールや鉢のかけら等を併用するか、径10mmくらいの吸水性のある軽石で植えます。

特に通気が良く、ある程度水保ちが良く、腐敗しにくいものであれば何で植えてもかまいませんので、入手しやすい材料を用いて下さい。